第1号

八尾おわら資料館だより

平成18年8月20日発行

（はじめに）　　八尾おわら資料館　名誉館長　長谷川　洌

このたび「八尾おわら資料館だより」（季刊）の第１号を発刊する運びとなり、大きな喜びを感じております。この「資料館だより」が皆様と当館とを結ぶ絆になるとともに、日本の伝統文化の極致とも言える「越中おわら風の盆」を再認識するきっかけになってくれるようにと念じております。

【当館所蔵文書（現代語訳）紹介】

ここにご紹介するおわら関連文書は、松本駒次郎著『八尾史談』（大正１６年発行）記載の原稿に、発刊以後のおわらの推移を加筆した内容となっており、大正から昭和初期に至る八尾のありさまや、当時のおわらの実情をさぐる上で、非常に大きな参考となります。

まさに当時は、おわら踊りや歌詞の改良が積極的におこなわれた時代であり、おわらの発展経緯を再検討する上でも、重要な文書だと言えます。

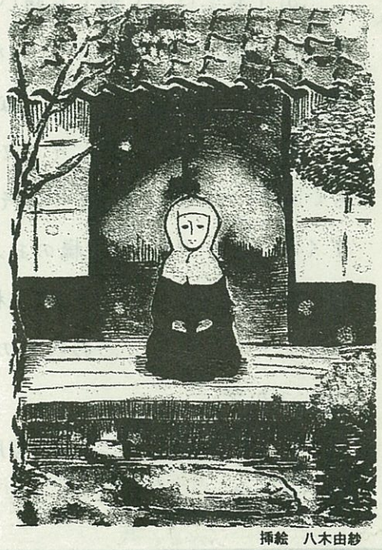
このたび、本文の趣旨を変えないよう配慮しつつ現代語訳をおこないましたので、幅広い方々にご一読願えれば幸いです。（４回連載予定）

第１回　小原比久尼（おはらびくに）の物語

その昔、江戸時代の文化年間（1804～1817）のころ、京都の尼・小原尼という方は学問にすぐれ、さまざまな芸事に通じておられたそうです。

ところが、この小原尼はとある事情があって京都に住むことができなくなり、やがて越中国の婦負郡にある下笹原村の卯花山に別荘を構えて住むようになられました。これにちなんで、このあたりの人々は卯花山のことを別荘山と呼び、尼僧が住んでいた屋敷跡を比丘尼屋敷と言うようになったのだそうです。

ある年の冬、大雪のために比丘尼が住んでいた別荘は雪の害をうけ、小原尼は山から下って、下笹原村の村上という所に庵堂を構えられました。比丘尼はこの村上の地に長い間住んでおられたために、このあたりの土地を小原島と称するようになりました。



挿絵　八木由紗

さて、小原尼はある年の盂蘭盆に、八尾の町へ托鉢に出かけられました。ちょうどこのとき、八尾の町は盂蘭盆のにぎわいで、若者たちが町の中で次ぎから次ぎに踊りまわっておりました。

小原尼は様々な芸事に通じておられたため、若者たちの唄い踊る様子に興味をいだかれ、托鉢するのも忘れて若者たちの歌に耳を傾け、踊る様子を見つめられました。

しばらくして、小原尼は知り合いの上新町・高善寺屋源四郎の家に立寄られ、廻り盆の由来などについてたずねられました。

（裏面へつづく）

壺中庵（こちゅうあん）愛吟詩紹介　その一

山中與幽人対酌（山中にて幽人とともに対酌す）　　李白（りはく）

兩人對酌山花開
一杯一杯復一杯
我醉欲眠卿且去
明朝有意抱琴来

（読み下し文）

両人（りょうにん）対酌（たいしゃく）すれば　山花（さんか）開く
一杯　一杯　復（また）一杯
我　酔いて眠らんと欲す　卿（けい）はしばらく去れ
明朝　意（い）有らば　琴を抱きて来たれ

（大意）

二人が向かいあって酒を酌み交わせば、山中の花が開く。
一杯、一杯、また一杯。
私は酔ってしまい、眠たくなってきた。君よ、しばらく立ち去るが良い。
明朝、もしも再びここに来る気になったなら、どうか琴を持って来てくれないだろうか。

（詩情鑑賞）

李白の七言絶句で、「開」「杯」「来」が韻を踏んでいます。

李白は「詩仙」と尊称される盛唐の大詩人で、「詩聖」・杜甫と並び称されています。また、こよなく酒を愛し、自ら「酒中仙（しゅちゅうのせん）」、つまり「酒飲みの仙人」と語ったと伝えられることから、「酒仙」とも言われています。

この詩は人里離れた山中で、隠者とともに酒を酌み交わす無上の楽しみを詠っており、同じく李白の「山中問答」や「月下独酌」の詩情に通じています。

初代おわら保存会長の川崎順二氏（壺中庵）は、自らこの詩を書き写され、常に座右に置かれたとのことですから、李白の詩境を真情から敬慕されていたのでしょう。

このことは同じく現実を超越した別世界の楽しみをあらわす「壺中（こちゅう）」を庵号とされたことからも、充分にうかがい知れます。

恐らく、今は八尾おわら資料館となっているかつての川崎邸・壺中庵においては、気心の知れあった文人墨客や飲み仲間たちが集い、「一杯、一杯、また一杯」と酒を酌み交わし、李白の境地さながら、世俗を離れた楽しみを尽くされたことでしょう。

（注記）

- 「與」　「与」と同義で、「～とともに」、「～と一緒に」の意。
- 「幽人」　世俗を捨てた隠者。山中に住む仙人のような人。
- 「対酌」　互いに向かいあって酒を酌み交わすこと。
- 「山花」　山中に咲く花。
- 「琴（キン）」　中国古代の弦楽器で、長さは約百二十センチメートル。柱（ことじ）は用いず、七本の弦を左手で押さえ、右手で弾く。同種の楽器として、琴より大型で十三弦の箏（ソウ）や、二十五弦の瑟（シツ）がある。

（後記）江戸時代から始まったと伝えられている「越中おわら節」の起源を探ることは至難の業で、時の流れの重さに圧倒されるばかりです。

しかし、限られているとは言え、今日に伝えられている資料を改めて見つめ直すことによって、八尾に生きた先人の心に触れ、ひいては「おわら」そのものを考えたいと念じて、本誌を発刊することになりました。

数多くの皆さんにご一読いただき、ご意見やご感想が寄せられることを願っております。

発行元　八尾おわら資料館　（文責・監修　桐谷　正）
〒九三九－二三五四　富山県富山市八尾町東町二一〇五ノ一
TEL　〇七六－四五五－一七八〇

その時折よく、高善寺屋の家に、八尾における諸芸の達人・宮腰屋半四郎や茗ヶ原屋小三郎、掛畑屋善兵衛などが酒や肴を持ち寄って集まってきており、これから酒を飲もうとしているところでした。

高善寺屋の主人は小原尼を席に招き、廻り盆のことについていろいろ話あいました。

小原尼が言いました。

「まことに世間にない、にぎやかな盂蘭盆でございます。しかしながら、若い方々の唄っておられるお歌は十人十色で、いかにも聞き苦しく感じられます。ことに同じ組の中でも、一人は『松坂節』を唄い、他の一人は『都々逸節』をお唄いなされるようでは、組の中そのものがバラバラになっているように思われます。こうしたことを改める上でも、できることなら新たに盆歌を作られ、このにぎわいを統一されましたら、いっそう愉快になると思われるのですが、いかがでございましょうか？」

これを聞いた一座の者たちは手を打って小原尼の言葉に賛同し、あわせて小原尼に盆歌の創作を依頼しました。

小原尼は何度も断られましたが、一同の者たちがあまりにも熱心に頼むものですから、ようやく引き受けられました。

小原尼は二、三日経ってから「お笑いぶし歌」を創作され、高善寺屋へ出かけられました。そして、一同の者たちを集めて、新しく作った歌を披露されました。

小原尼が新しい歌を「お笑いぶし」と名づけられたのは、盂蘭盆に踊りまわる若者たちの姿がいかにも滑稽で、ひょうきんな姿をしていたからです。

この「お笑いぶし歌」を聴いた宮腰屋半四郎が言いました。

「実に結構な、すばらしく上品な歌でございますな。ことに『お笑い節』とは、いかにも陽気な歌の名でございます。しかしながら、『お笑い』と入れ文句をいたしますと、少しはかり唄いにくいように思われます。そこで『い』の字を抜いて、『おわら』という入れ文句にいたしましたらいかがでございましょう。そうすれば唄いやすくなるばかりか、庵主様のお名前と同じ入れ文句になりますので、末永く庵主様のことを覚えておくことができると思われるのですが、いかがでしょうか？」

すると茗ヶ原屋小三郎は、宮腰屋説を助けて言いました。

「宮腰屋。なかなかうまいところに気がついたではないか。それは良い案だ！」

このようにして、宮腰屋が改めたように、「おわら」と入れ文句することに決まったのです。

さて、この年はめったにないくらいの豊作年で、稲は言うまでもなく、他の穀物や野菜の類にいたるまで上々の作でした。そのために、旧暦の十月一日から三日間は豊年盆として、八尾の町は非常ににぎわいました。

ことに新しく作られた歌「おわらぶし」の人気は大変なもので、他の「松坂ぶし」や「おきんさぶし」は、次第にすたれていきました。

一方、新歌「おわらぶし」は、またたく間に富山や高岡あたりにまで流行しました。さらに富山の売薬屋さんたちは、お国自慢の新歌として、日本中いたる所にこの新しい「おわらぶし」を伝えました。

こうしたことから、おわらぶしは全国に流行しました。その名残として、今もなお薩摩国には「鹿児島小原節」があり、新潟県には「越後おわら」、青森県には「津軽おわら」があって、それぞれかすかながらも今日にまで伝えられているのです。

しかしながら、残念なことに、これらの歌は永い年月の間に歌や調子のいずれもが崩れ、下品になってきております。ことに「越後おわら」などは越後獅子の舞い歌にでも用いられたせいか、歌の調子は極めて早く、まるで駆け足をしているようです。そして、一首の歌を唄い終ると、必ず口早に「イチャ　イチャ　イチャナイ」（アリャ　アリャ　アリャセ）とはやすようになりました。

また、近年になって、「おわら節」は「大藁節」の略語で、豊年万作を祝う意味から出た歌だと主張する人が出てきました。さらに、それ以外にも様々な説が唱えられていますが、これらはいずれも根拠のない説で、とうてい信ずるに足らないものなのです。

おわら歌詞紹介

（おわら資料館古謡短冊より）

キリギリス
草を離れて籠住居
逢わぬつらさに
オワラ　泣くわいな

声はすれども
姿は見えぬ
すがた草葉の
オワラ　きりぎりす

昔の人は、おわらの歌詞に身のまわりの様々な風物を恋唄として詠みこんできた。草むらの中の夏の虫・きりぎりす。その鳴き声はなつかしい。